

シェイクスピアの作品における 隠喩に関する考察

A Study on the metaphors in Shakespeare's Works

谷 崎 寿 人

1

アボット (E.A. Abbott) は、その著 A Shakespearian Grammar (1869) の中に、Simile and Metaphor という一章を設け、その冒頭、「類似」(similarity) にふれて次のように言っている。「今までに見たことのない事物をことばで説明するためには、既に見たことのある事物(単数もしくは複数)の特徴を用いて説明をする。従って、ライオンを見たことのない人に、ライオンはいかなるものかを理解させるためには、ライオンとは馬のたてがみ、猫のつめおよびその他に似たものをもつものと言わねばならない。つまり『ライオンは馬のたてがみを有する巨大な猫のようなものである。』と云うるのである。この一文はものの類似・類似性を表現している。」

次いで、直喩にふれ、「……海や船を見たことのない陸上生活者に、船と水との関連を説明するためには、『船は、すきが畑の土を掘りかえして進むように、水を切って進むものである。』と言ってよいであろう。換言すれば、『船と海との関連性はすきと土壤との関連性に類似する』この一文は関連性の類似を表現し、直喩といわれる。」そこで、次の定義が成立する「直喩とは関連性の類似を表現する文である。」

さらに、隠喩に言及し、直喩を圧縮して隠喩となすとし、次のように述べている。「直喩は厄介なものであり、散文に用いるよりは韻文に適している。さらに、直喩が長期間使用されている場合は、同化関係を単に類似的とみなすのではなく同一であるとみなす傾向がある。直喩は船と海との関連を、土をすきですくようなものである。と控えめに主張する。圧縮形直喩はさらに進んで、船と海との関連は、船が海をすいて進む。と主張する。従って『船は波を切って進む』(動詞は「すきで耕す」意味のものをそのまま用いる)と表現される。かくして、「すき」と「土地」との関連は「船」と「海」に意味の転移がおこなわれたことになる。このように圧縮された直喩は隠喩すなわち転移とよばれる。そこで隠喩を定義すれば次のようになる。「隠喩は説明を簡潔ならしめるために一組の事物内の関係を別の一組の事物内の関係に移動させることである。」

また、隠喩には明示的隠喩 (fully stated metaphor) と暗示的隠喩 (implied metaphor) がある。前者は「船は波を切って進む。あるいは、船は海を切りひらくすきである。」ということであり、後者は「風は海のすきを引く馬である」と言う場合である。海のすきが船を意味するということは、前者 (明示隠喩) においては明確に述べられており、後者 (暗示隠喩) においては暗示されていることになる。

つまり、ある事物を表現するのに、like, as など類似を明示する語を用いず、効果的な代用物をもって表現することである。直喩であるならば、A is as~as (or like) B という形をとるものであるのが、隠喩においては A is B の形をとる。具象的事物を指す語が抽象的に用いられる場合は隠喩となるわけである。従って「直喩の圧縮は隠喩となり、隠喩の敷衍は直喩となる。」とも言うことができる。

シェイクスピアの作品は、同時代の他の作家にくらべて、語彙 (vocabulary) の多いことが特徴となっているが、また比喩的表現の多いことでも知られている。比喩的表現の中には、もちろんのこと、直喩と隠喩がある。直喩よりも隠喩が多く、しかもひとつひとつの語の意味、それらが集って作られる文の意味の解釈においては、圧縮されていない直喩の方が理解しやすく、隠喩は、直喩の圧縮された形式であるために、それだけ一層理解しがたくなっている。ある語彙をとりあげてみて、この場合の意味が果して転義であるかどうか、識別しにくい場合がある。つまり具象的な事物を指す語が、抽象的に用いられているかどうかが問題となる。基準はある語が本義—文字通りの意味—をあらわしていないことである。

以下は、上記の点に留意して、シェイクスピアの作品の中から (全作品ではない) 隠喩表現と考えられるものを、いくつかの項目について考察することにする。もとより扱う項目は、シェイクスピアの作品中にあらわれる語彙中の極めて小なる一部分であり、かつ品詞の点からいえば主として名詞を扱うことにする。他の品詞あるいは隠喩的成句 (metaphorical phrase) についてはほとんど触れていない。これは、隠喩表現が名詞に特に多いと考えたがためである。

2

1. 天体

1—1 太陽……when/Those suns of glory, those two lights of men/Met in the vale of Andren (Henry VIII, I, i, 5~6) sun も light も権力者、指導的人物を意味し、ここではふたりの国王を指してある。

1—2 月 Arise, fair sun, and kill the envious moon,/Who is already sick and

pale with grief, (Romeo and Juliet II, ii, 4—5) 月は処女性と狩猟の守護神ダイアナのこと、さらには一般に容姿端麗な若い女性を意味することになる。

1-3 星 Some consequences yet hanging in the stars (Romeo and Juliet I, iv. 107) 星は人間の運命を左右する力をもつもの、天上で人間の動きを見ている神の目である。また人間に関しては、This star of England (Henry V V, ii. 408) にみられるように、優れた資質の持主を意味する。

1-4 大地 Nay, in the body of this fleshly land (King John IV, ii. 245) 人間の肉体を指して、領土ということばを用いているが前に fleshly という形容詞があって、この形容詞は転義ではないので、隠喩とはいえないのかもしれない。シュミットのレキシコン (A. Schmidt: Shakespeare Lexicon) には、この場合の land を隠喩的用語の見出しの下に挙げているが。

2. 自然現象

2-1 雨 You foolish shepherd, wherefore do you follow her, / Like foggy south puffing with wind and rain? (As You Like it III, v. 49—50) この場合の雨は、「涙の雨を降らしながら」ということであり、人間の涙の隠喩である。また Hamlet IV, v, 166 においては、動詞 rain を次のように用いている。And in his grave rain'd many a tear :—

2-2 あらし I will move storms, I will condole in some measure. (A Midsummer-Night's Dream I, ii, 29) 非常な興奮状態を storms によってあらわす。storm の転義としては動揺さらには人間の感情にまでおよぶわけである。

2-3 霧・もや Macbeth 冒頭三人の魔女が登場し、手短かに予言をし退場するわけであるが、退場の際 Fair is foul, and foul is fair : / Hover through the fog and filthy air. とする。(Macbeth I, i, 11—2) また同じく、第三幕第五場では Hark : I am call'd ; my little spirit, see, / Sits in a foggy cloud, and stays for me. (III, iii, 34—5), A Midsummer-Night's Dream では as in revenge, have suck'd up from the sea / Contagious fogs ; which falling in the land (II, i, 89—90) とある。名詞 fog, 形容詞 foggy いずれも悪魔にまとりついているものを意味する。すなわち悪魔の周辺にただよう妖気を意味するようになっている。

2-4 昼 The trumpet sounds retreat ; the day is ours. この day の語義は a day of battle (戦い) の意から転じて victory (勝利) の意になる。これは本来 day の語義のひとつとしてあったものか、後 (のち) に付加されたものか。OED によると初出

は1557年とある。

2-5 夜 For by this black-fac'd night, desire's foul nurse/Your treatise makes me like you worse and worse (Venus and Adonis 773-4) 「黒い顔の夜」の後には同格として「情欲の醜い乳母」があるが、夜の隠喩としては、なかなか理解しがたいものであろうか。

3. 植物

3-1 ひなげしとすみれ There's a daisy: I would give you some violets, …… (Hamlet IV, v, 183-4) 同じく Hamlet には, And from her fair and unpolluted flesh/May violets spring (V, i, 261-2) とある。daisy は純潔を, すみれは誠実をあらわしている。後者では「無垢の肉体から, すみれの花が……」とあるように, けがれなき女のことである。

3-2 ばら O rose of May! /Dear maid, kind sister, sweet Ophelia (Hamlet IV, v, 157-8), ばらは若さと美の象徴であり, この場合の「五月のばら」は, もちろん, オフェリアの若さと美の隠喩であるといえよう。その他 therefore, my sweet Rose, my dear Rose/be merry (As You Like it I, ii, 24-5) では Rosalind に Rose とよびかけている。つまり Rosalind は Rose の象徴を所有しているわけである。

3-3 桜草 Whiles, like a puff'd and reckless libertine, /Himself the primrose path of dalliance treads, (Hamlet I, iii, 49-50) I had thought to have let in some of/all professions that go the primrose way to she/everasting bonfire. (Macbeth II, iii, 20-22) にみられるように, この場合はどちらも形容詞的に用いられて, the path of pleasure 「歓楽の花咲く」という意味をもっている。

4. 動物

直喩の場合も, 人間の性質をあらわすのに比喩の対象として動物が用いられることは, 極めて多い。隠喩の場合もまた同様である。また同じ動物が文脈によっていくつかの隠喩を構成することがある。

4-1 猿 You show'd your teeth like apes, and fawn'd like hounds (Julius Caesar V, i, 41) これは直喩の形式であるが, 追従笑いをする人間を猿に擬したものの。その他模倣の象徴とされることは言うまでもないし, おろか者を指すこともある。

4-2 ろば I see their knavery: this is to make an ass of me; to fright me, if they could (A Midsummer-night's Dream III, i, 123-4) 「これはおれをろばにしよ

うというのだ。……」 ass=stupid fellow が固定しているのである。同じく III, ii, 17 には an ass's nole I fixed on his head, とある。

4-3 熊 No, no, I am as ugly as a bear ;/For beasts that meet me run away for fear : (A Midsummer-Night's Dream II, ii, 94-5) これは直喩形式である。しかし原則として、直喩は圧縮すれば隠喩となるのであるから、I am a bear,/He is a bear が可能であろう。その場合の属性は「みにくい」ということになろう。

4-4 猫 マクベス夫人は夫を the poor cat と言って軽蔑する。And live a coward in thire own esteem,/Letting 'I dare not, wait upon 'I would'/Like the poor cat i' the adage? 臆病猫というのである。これは、諺 'The cat wou'd eate fishe, and would not wet her feete.' から出たものである。その他にも猫は非難さるべき人間の性質をあらわす隠喩に用いられることが多い。

4-5 犬 Which, like your asses and your dogs and mules,/You use in abject and in slavish parts, (The Merchant of Venice IV, i, 92-3, ここでは犬だけでなくろばもらばも同様に奴隷の隠喩となっている。A dog of house of Montague moves me, (Romeo and Juliet I, i, 10) 同じく14行にも A dog of that house とあるが、共に他人に対する侮辱的なことばである。

4-6 鷲 As sparrows eagles, or the hare the lion. (Macbeth I, ii, 35) 雀に限らず他の鳥も鷲を恐れる。それは丁度兎がライオンを恐れるように。鷲は武将の隠喩である。シーザーにも次のような個所がある。

Coming from Sardis, on our former ensign/Two mighty eagles fell,…… (Julius Caesar V, i, 60-1)

4-7 鷲鳥 Though thou canst/swim like a duck, thou art made like a goose. (The Tempest II, ii, 134-5) ここでは、先にあげてある鴨は字義通りであろうが、鷲鳥は文脈から推して fool(馬鹿者)を意味するものである。ロメオの言う Thou wast never with me for any thing/when thou wast not there for the goose (Romeo and Juliet II, iv, 79-80) の中では愚行を意味している。

4-8 馬 The unknown Ajax/Heavers, what a man is there! a very horse,/That has he knows not what (Troilus and Cressida III, iii, 125-7) a very horse は「自分に何がそなわっているのかを知らない男」ということで、軽蔑的に用いられている。

隠喩は、想像力によっていかようにも作り出されるものであろうが、作者の想像力があまりにも大であれば、読者、あるいは劇の場合は観客にその意図が伝達されないことになる。従って両者の間に、ある場合のこの語は字義通りにうけとってはならないという認識がなければならない。その点で英語国民でない者にとっては、英語を母国語とする者よりもはるかに諒解しがたいことになるが、やむをえないことであろう。隠喩は文彩のひとつであるから、表現の正確さという点では、大いに欠けるところがあることもまた無理からぬことであろう。

参考文献

Abbott, E.A: A Shakesperian Grammar (Macmillan, 1869)

平岩紀夫「シェイクスピアの比喩研究」(松柏社 1977)

Ogden and Richards: The Meaning of Meaning (Routledge and Kegan Paul, 1923)

山本忠雄「シェイクスピアの言語と表現」(南雲堂 1959)

なお

Schmidt, A: Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary (Dover Publications, INC. 1971) は終始用いた。

(たにざき ひさと 本学助教授・英語)